

義拳か蛮行か、百家争鳴

困惑気味の新聞論調

星亨刺殺事件は社会を驚愕させた。新聞はどう論評したか。

星糾弾の先頭に立った「毎日新聞」は、事件の第1報を雑報欄で簡略に扱った。その記事の最後に加えた以下の文章に、困惑がにじむ。

「吾人は専ら平和の手段に依り、彼（星のこと）をして其の非行を改悛して正義の軍門に降らしむを期せしに、今や刺客の手に斃るるに至りしは、吾人が切に彼の為に悲しむ所なり。（略）吾人は伊庭が自ら進んで文明の大義に反するの行爲を取りしを痛惜せずんばあらず」

だいぶ回りくどい。星の非を責めながらも、刺殺という行爲を是認するわけにはいかなかった。

事件を大々的に報じた「読売」「東京朝日」両紙も、論評は控え気味だった。改進黨系の「毎日」のように政論を掲げる新聞（大新聞）と違い、大衆啓発をめざす新聞（小新聞）として、客観報道を旨としたからでもあろう。

「朝日」は、「政界の激動は大小となく、ややもすれば正常の判断を失わしむ。星亨君をして収賄事件に関係あらしめるも、其の罪あに其の死を値せんや」と記した。

一方、「読売」は、「覆面論士」による記事で、想太郎について「生命とともに地位、資財を捨てて義拳を企て、直ちに廷尉の庭に自首したるは、実に天晴の義人なり」とした上で、「さあれ、今日以降の天地には伊庭一流の蛮行を要せじ」と締

めくくっている。

想太郎には同情的ながら、刺殺という行爲は許せない、というのが大方の新聞論調だったと言えるだろう。

「不謹慎の言論」批判も

その中で、これまでの激しい星糾弾の報道について疑義を唱える新聞もあった。政府系といわれた「中央新聞」は、「不謹慎の言論」と題した社説を掲げ、「不穏なる言辞を弄し、姦賊若しくは公盗の文字を用いて」と、暗に「毎日」を攻撃した。

徳富蘇峰の「国民新聞」も論陣を張った。

「言論の不謹慎なるが為に、間接に於いては刺客を教唆するが如き形跡なしとも限らず」として、以下のような報道批判を展開している。

「吾人は実に言論の適当なる範囲を超えたる害毒の、刺客の毒刃よりも恐る可きを見る。言論豈憚まざる可けんや。（略）当今の論客に対しては、切に其の猛省を催告せざるを得ず」

暴露キャンペーンを得意とする黒岩涙香の「萬朝報」は、社会のあり方にも論及した。

「星の遭害は星彼れ自身の行爲も一因ならん。伊庭の愚なるも一因ならん。新聞紙の言論も一因ならん。而して彼等をして此に至らしめたるの根本的大原因は実に社会が其の判断と制裁の力を喪失せるに由らずんばあらず」

事件は、創成期にあったわが国のジャーナリズムに重い一石を投げかけた。それは政府の言論弾圧に口実を与えるものでもあった。

百家争鳴のなか、事件の予審が始まった。



連日のように星亨を糾弾した「毎日新聞」と当時の新聞各紙の題字